

海自特別警備隊「脱落者制裁」集団暴行死亡事件の真相究明を求める

久野成章

海上自衛隊特別警備隊の隊員を養成する第一術科学校（江田島市）の特別警備課程で九月、同課程を途中でやめ、潜水艦部隊への異動を二日後に控えた男性三等海曹（二五歳）が、一人で隊員十五人の相手をさせられ急性硬膜下血腫で死亡した。十四人目の三発目のパンチを受けて倒れるまでに、二百三十発の打撃を受けた。海自呉地方総監部は、事件当日と死亡翌日に「訓練中の事故」と広報したが、三曹が十五人の相手をしていたことなどは隠していた。五月にも別の隊員が異動直前の「格闘訓練」で隊員十六人の相手をさせられ、負傷していた。教官らは三曹の遺族に「（異動の）はなむけのつもりだった」と説明し、三曹の遺族は、「訓練中の事故ではなく、異動の『はなむけ』と称して脱落者の烙印を押し、制裁と見せしめの意味を込めた集団での体罰だ」「真実を明らかにしてほしい」と言っている。同課程をやめる隊員に対し、「訓練」との口実で集団暴行が常態化し、「脱落者への制裁」「リンチ」の可能性が非常に高い。

この事件は、一〇月一二日にマスコミの知るところとなり一三日に報道された。一七日、ピースリンクは麻生首相・浜田防衛相・杉本海上自衛隊呉地方総監あての「集団暴行事件についての抗議および真相究明を求める要請書」申し入れ行動をした。二十九日、社民党の阿部知子衆院議員ら一〇人は第一術科学校を視察し、「隊長や教官には格闘を指導するための教育を受けた経験がない。安全配慮が全く果たされていない」と指摘した。

海自は創設時からとも、人間同士の「白兵戦」は想定されていない。その常識を超える自衛隊初の特種部隊として特別警備隊は、一九九九年三月二二日の能登半島沖不審船事件を契機に創設が決定された。イギリス海兵隊の特種舟艇部隊（SBS）教官から基礎訓練を受け、二〇〇一年三月二七日江田島基地に正式開隊。この年の六月二〇日より約一ヶ月

間、江田島にて米海軍特殊戦グループ1（NSWG1）から訓練を受けた。一二月二二日奄美沖で九州南西海域工作船事件が発生した際、政府から出動待機命令により出動体制に入るが、その前に不審船が自沈した為、初出動にはならなかった。昨年六月二八日マスメディアに対して初めて公式に訓練が公開。広島県宮島周辺海域にて、哨戒ヘリコプターと高速ゴムボート「特別機動船」から、不審船に見立てた水中処分母船に乗り移り制圧する内容。海自では特別警備隊の訓練の公開は「これが最初で最後」としている。

任務は、防衛出動および海上警備行動時の不審船等に対する立入検査、すなわち臨検である。不審船の武装解除、無力化を行うこととされ、現在の編成、個人装備、指揮系統などの情報はすべて非公開とされ、陸上自衛隊特殊作戦群との有機的結合が狙われており、全体的な即応力、機動性を発揮していくことが追求されている。つまり、海自特別警備隊とは、教育・訓練までも「対テロ戦争」を想定した実戦的組織へと自衛隊が変ぼうしつつある中、危険かつ誤った方向、すなわち武力行使の道歩んでいる最大の証拠の部隊である。

今回の事件は、自衛隊内に統発している隊員同士の「いじめ」や私的制裁の内容を超えており、上官の指導・監督のもとで行なわれた暴力事件であり、明白な規律違反であり、指導教官の刑事責任も問題となりうる事件である。にもかかわらず、海自は、総監部内に独自の幹部ら約十人による事故調査委員会を設置し、また、捜査は身内に甘い海自警務隊が行っている。ピースリンクや社民党は、真相究明のため、組織外部の第三者による調査委員会を設置することを求めている。引き続き監視し、幕引きをさせてはならない。

（くの・なるあき／ピースリンク広島・呉・岩国）